

141. 昭和60年度滋賀県下における発掘調査の紹介 その4

42. 弥生時代中期の周溝墓群

草津市下物地先 烏丸崎遺跡

烏丸崎遺跡は、前年度の調査で方形周溝墓群や玉造工房とされる堅穴住居が発見されるなどして、南湖に突出した半島上にも遺跡の広がることがわかってきた。本年度は、半島のつけ根を南北に横断する秋の川に沿って調査を行った。

本年度の調査では、調査区全体に平安時代末から鎌倉時代頃と弥生時代の上下2時期の遺構面が確認された。上面では、耕作跡と考えられる小溝群が検出されたのみであるが、下面では11基以上の方形周溝墓や土壙や溝などが検出された。

方形周溝墓群は、たがいに溝を共有したり、先行する方形周溝墓の溝や墳丘の一部を削って作られているものが多い。また、周溝内には供獻土器がほとんど認められず、今回調査した方形周溝墓の一つの特徴としてとらえられよう。わずかに出土した弥生土器は、墳丘上から溝内に落下したと思われる出土状況を示している。この土器の時期は、弥生時代中期前半である。

方形周溝墓がつくられる以前に、弥生時代前期の遺跡が営まれていたようで、方形周溝墓の溝内などからその時期の土器が出土するほか、土壙などが検出され



方形周溝墓

た。弥生時代前期の土器は、古い様相をとどめた第I様式中段階のものである。

今回の調査地点の性格は、弥生集落のもつ基本生活領域としての様相は薄く、機能空間として、それも墓地専用に利用されていたものであろう。

(財滋賀県文化財保護協会 兼康保明)(前角和夫)

43. 繩文時代後期の遺物包含層・弥生時代中期の溝など検出 草津市志那中町地先 志那湖底遺跡

今回の調査は、湖岸堤管理用道路志那北その2工区の試掘調査である。だが、五号幹線樋門、南側湖岸堤、北側湖岸堤及び堤脚水路より、繩文時代後期の遺物包含層、弥生時代中期の溝一条、古墳時代後期～白鳳時代の溝などを検出したために、引き続いて樋門部分と南側湖岸堤について、発掘調査を行った。

この結果、樋門部分とこれに接続する南側湖岸堤部分から、湖岸に沿って、幅約20m～30mで南北に延びる帶状の遺物包含層(繩文時代後期)を検出した。ここからは、中津式・北白川上層式などの土器が出土した。さらに、掘之内式といった関東系の文様をもつ土器も多数見られた。

北側湖岸堤部では、繩文時代晩期の土器が検出され、同期の包含層が存在するのではないかと考えられている。北側堤脚水路部分では、弥生時代中期と古墳時代後期から白鳳時代の溝がそれぞれ一条ずつ検出された。弥生時代中期の溝には、第III様式の土器も少量混入しているが、第IV様式に属する土器が大半をしめている。古墳時代後期から白鳳時代の溝からは、土師器・須恵器などの他に、石器・瓦・木製鋤・田下駄などが出土した。さらに、漆塗りの鞍前輪も出土した。北側堤脚水路の東側断面には、礎石をもつ建物の柱穴らしい落ち込みを確認しており、陸側の水田に集落跡があるのではないかと考えられ、さらに瓦も出土していることより、かなり大きな規模の建物があったのではないかと考えられる。北側湖岸堤及び堤脚水路部分は、まだ未発掘の部分があり、今後に課題を残した調査であった。

(財滋賀県文化財保護協会 奈良 俊哉)



黒漆鞍

44. 区画溝を持つ奈良時代の集落跡

草津市東矢倉 矢倉口遺跡

本遺跡については、既に京滋バイパス建設の事前に発掘調査が行われ、計39棟にのぼる掘立柱建物跡の他多数の遺構と木柵をはじめとする多彩な遺物が発見されており、東山道・東海道に近接した奈良時代～平安時代前期の集落跡として注目すべきものがあった。

このたび、京滋バイパスに西隣した、本遺跡南西部にあたる土地における宅地造成の事前に発掘調査を実施したところ、掘立柱建物跡12棟、井戸跡3基、土壙、溝跡等多数の遺構を発見した。建物跡には2間×2間の倉4棟と3間×5間～2間×2間の家屋8棟が認められ、建物軸、出土遺物から推定すれば、京滋バイパス法線内の各建物跡同様、奈良時代中葉～平安時代前期にかけて存在した一連の建物群であり、その建造は最低三期にわたるものと考えられる。ただし、今回発見の建物跡の中には床面積60m²を越える大型家屋2棟が存するとともに倉もやや大型化するものが認められるなど、本遺跡の中心的建物群である可能性が高いと思われる。

さて、今回の調査における最大の成果は、以上の建物群の南辺と西辺を限る溝跡S D 1で、本溝は各建物跡の方位と同じ基軸を有し、溝内遺物も建物群の建造された時期と大差のない時代のものである。したがって本溝は、当該地区の各建物跡と密接な関連を持つ遺構と考えられる。さらに本溝は、京滋バイパス法線内で発見された3条の溝跡に連続し、方一町の規模を有す区画溝である可能性が高く、矢倉口遺跡南部の一画に配置された掘立柱建物群を囲むする溝渠と考えられ、極めて重要な遺構と思われる。昭和61年度には引続き、今回調査地の北側を調査する予定であり、その結果次第で一挙に本集落の特異な性格が浮びあがるであろう。

(草津市教育委員会 別所 健二)



遺構全景(夏期調査区)

45. 平安時代後期から鎌倉時代の集落跡検出

草津市矢倉 南平遺跡

草津川代替住宅団地造成に先立ち昭和59年度から2か年にわたり、約4,100m²の調査を実施した。うち昭和60年度は調査区の南側2,000m²の調査を実施し、掘立柱建物跡12棟、柵列4条、井戸跡2基、溝跡14条、道状遺構1基の他、多数の柱穴、土壙を検出した。

掘立柱建物跡はほぼ方位により3群に分類され、I群はN-30°E、II群はN-20°E、III群はN-7°Eを測る。I群、II群については遺物が希少であるため明確な時期は限定し難いが、他の調査区の関連から奈良時代末期から平安時代前半に当たると思われる。III群については、出土遺物から12世紀後半から13世紀前半と考えられる。

また、多数検出された柱穴のうち7世紀代の須恵器を出土するものが存在することから、当該期の建物跡の存在が推察される。



遺構検出状況

井戸跡2基のうちS E01は、出土遺物から13世紀中頃から後葉に廃絶したものと考えられ、III群の建物群に付随すると考えられ、遺物は、中層からわりあいまとめて出土している。特に出土した黒色土器には、体部および底部に「ぬ」・「め」等のひらがなと思われる墨書のあるものが数点出土している。また、黒色土器と伴なって瓦器、土師器、漆器が出土しており、中世の土器様相を知る貴重な資料である。

(草津市教育委員会 谷口 智樹)

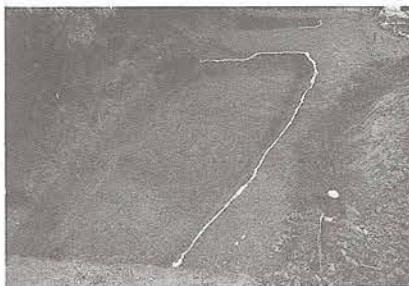
46. 周濠に陸橋部を有する前期古墳

草津市追分 追分古墳

追分古墳は、草津市追分町の野上神社境内に所在する古墳で、大正15年に墳丘中央部より粘土甌の主体部が検出され、鏡、刀剣、斧頭、銅鏡、鉄鏡等が出土した。これらの特徴より、当古墳は、4世紀末の草津市最古の古墳とされた。

当古墳の墳丘は、後世の開発により削平を受けているため、墳形、規模について不明な点が多く、現在は円形の墳丘が残存するのみであるが、付近の等高線が北西方向に張り出すことから、北もしくは西側に前方部を持つ前方後円墳であった可能性が考えられて来た。

昭和57年に墳丘北西部において個人住宅建築が計画されたため、発掘調査を実施したところ、幅4.2～7.0m、深さ80cmの円形に巡る周濠が検出され、北または西側に前方部の存在する可能性はなくなつた。さらに



追分古墳周濠と陸橋



掘立柱建物と井戸

戸枠を持つ。掘り方は狭く、底部付近では井戸枠径と大差ない。井戸枠径は、底部で1.1m、深さは4.2mを測る。

遺物は、全般的に9世紀代の須恵器、土師器が多く、その他、S E - 2 の井戸枠内、裏込め内を中心、鍋

鋳型、輪羽口、埴堀の破片

多数、また、井戸枠内より鉄鉗1点が出土した。これらの出土により、当遺跡で鍛冶が行われていたことが推測される。なお、鍋鋳型の出土例は、全国的にも僅少で、かつ、当鋳型の使用時期が、井戸の構築時期の9世紀以前に遡ると考えられることから、極めて重要な資料と言える。 (草津市教育委員会 藤居 朗)

墳丘測量の結果、墳丘の南～南東側にも周濠の痕跡が認められ、墳丘径38m、残存高3.3mの円墳であるとほぼ確定できた。

そして今回、墳丘南西側において店舗建築が計画されたため、昭和60年7月に発掘調査を実施したところ、幅3.3m以上、深さ70cmの周濠を検出し、当古墳が円墳であることをさらに裏付けた。また、今回の調査で、幅約3mの陸橋部が存在することが確認され、前期古墳としては、全国的にも極めて希少な発見例となった。

なお、遺物としては、周濠内の墳丘側より円筒埴輪片が多数出土したが、当古墳の築造年代と考えられる4世紀末のものは少なく、大半は5世紀代のものであるために、当初の埴輪列が少なく、後に追加されたか、当初の埴輪列の修復のため差し替えが行われたか、どちらかの可能性が考えられる。

(草津市教育委員会 藤居 朗)

47. 井戸掘方より9世紀以前の鍋鋳型出土

草津市東矢倉 矢倉口遺跡

矢倉口遺跡は、京滋バイパス建設に伴う調査により、古墳時代前期から鎌倉時代に至る大集落が確認された遺跡である。

昭和60年9月に京滋バイパス東側の当遺跡推定範囲の北東端付近において医院建設が計画されたため、事前発掘調査を実施したところ、奈良時代～平安時代の掘立柱建物跡2棟、井戸跡2基、土壙等が検出された。

掘立柱建物跡は、一方が2間×2間、もう一方が2間×2間以上の規模を持ち、ともに縦柱で、倉庫と考えられる。他にも柱穴が多く検出されたが、調査区が狭小なため、建物としてまとまるものは少なかった。

井戸跡は、調査区東側で検出されたS E - 1と、西側で検出されたS E - 2がある。S E - 1は、深さ3.6mで井戸枠が残存しないが、径が中央部付近で2.3mと大きく、埋土内より板材が出土していることから、本来井戸枠が存在し、廃絶時に抜き取られたと推測される。

S E - 2は、検出面での径が2.2mと小さく、丸木材を割り貫き、分割した枠材を何枚も組み合せた井

48. 6世紀前半の掘立柱建物群

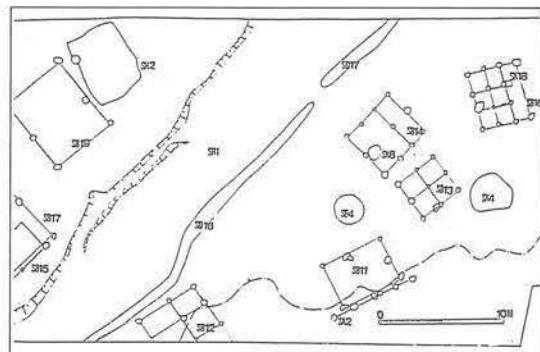
草津市 中畠遺跡

中畠遺跡は、東西方向へ発達する段丘端部に立地し、周辺には矢倉古墳群(古墳時代後期)及び、南平遺跡、大塚遺跡、谷遺跡等の古墳時代～近世にかけての集落跡が集中して存在している。

今回の調査は、草津川改修工事関連の草津用水水管移設工事に伴う事前調査として実施された。

調査の結果、弥生時代前期～室町時代にかけての集落跡であることが判明した。特に草津市域において検出例の少ない竪穴住居の発見及び、古墳時代の掘立柱建物群の発見は、注目すべきものである。以下、竪穴住居と掘立柱建物群について述べることとする。

竪穴住居は3棟検出されており、いずれも後世の削平を受けている。このうち比較的残りのよい住居内からは、5世紀後半の須恵器を伴う多量の遺物が出土しており、他の竪穴住居も大概この時期であると考えられる。掘立柱建物群は、区画溝と思われる溝の北側に位置し、掘立柱建物4棟(内1棟は倉跡)が、広場的



主要遺構配置図(部分)

空間地をとり囲む様に配置されている。柱穴内の遺物及び、建物に近接した土壤内の遺物より当該掘立柱建物群の時期は、古墳時代後期（6世紀前半）と推測され、竪穴住居から掘立柱建物へと移行する瞬間の遺跡として、また矢倉古墳群を考えていく上でも非常に意味のある遺跡といえる。

（草津市教育委員会 小宮 猛幸）

49. 草津川関連遺跡（御倉・北萱地区）の調査

草津市御倉地先 草津川改修関連遺跡・北萱遺跡

本遺跡は、草津市御倉地先に所在する。市内を西に向かって流れる北川の下流、主要地方道彦根近江八幡大津線（通称浜街道）の西に設定されたトレンチから、河川跡等の遺構と多量の遺物が出土した。トレンチは3か所に設け、西からB II・B III・B IVとした。

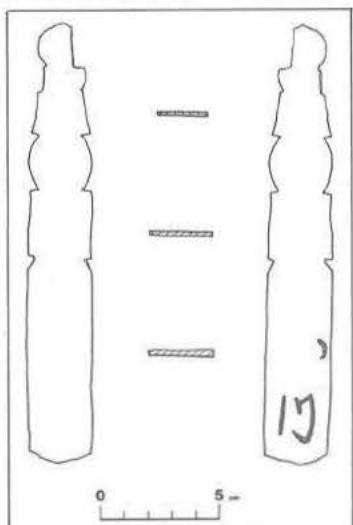
B II トレンチは約 1,700m²の広さをもち、約 3 m 剣り下げられた。明確な遺構は発見されなかったが、繩文早期～中世の遺物包含層が確認された。遺物は、上記範囲内の全時期について見られるが、古墳時代中期（5世紀代）の遺物がその中心を占める。遺物の内訳は、土器以外では石鏡や勾玉・管玉等の玉類、梯子・豎杵等の木器類、土錐である。

B III トレンチは約 800m²の南北に長いトレンチで、地表より約 2.5～3 m 下がった面に中世と5世紀の河川跡（自然流路）が検出された。中世河川は褐色砂に覆われており、砂層中より多量の土器類が完形品を多く含んで出土している。5世紀の河川は暗褐色粘土層中に土器や多量の木器類が包含されていた。

B IV トレンチは、約 2,000m²の面積を現在調査中である。地表より約 1.5～2 m 剣り下げたところに中世の包含層が存在し、土師器・瓦器・黒色土器等の鎌倉時代を下限とする

土器類と板塔婆・こけら経・下駄・漆椀等が出土した。その包含層の下に大小 2 つの河川跡（自然流路）が確認されている。小河川は褐色砂、大河川は暗褐色粘土で覆われ、小河川が新しいことから B III トレンチの河川と関連があると思われる。

B III・B IV で確認された河川跡は、



板塔婆

真横を流れていた北川の当時の流路であろうと思われ、その上流域に5世紀頃の集落が存在する可能性が考えられる。

（飼滋賀県文化財保護協会 三宅 弘）

50. 琵琶湖の水位変動を知る貴重な湖底遺跡

守山市赤野井地先 赤野井湾遺跡

調査は60年5月から11月まで、琵琶湖総合開発に伴う天神川水門工事の事前調査として行われた。遺跡は島丸半島から法童川河口域までの広大な湖底遺跡で、これまでに縄文時代早期からの遺物が出土している。

今回の調査は天神川水門工区地区で、湖岸から50m 沖合に鋼矢板で締切った90×80mの範囲を発掘調査し、遺構の検出を行った。

調査の結果、弥生時代後期の溝と、古墳時代初頭の足跡群、古墳時代後期の溝のほか多数の木器や土器が出土した。

弥生時代の溝は、海拔 82.70m では南流し、幅約 6 m、深さ 0.5～1 m で、土器のほか、武器形木製品、石庖丁形木製品、丹塗板なども出土した。足跡群は粘質土を含み込んだ上面に砂が流入したため保存されており、足跡群を区画する小規模の流路と畦畔状の高まりが検出された。水田跡かと思われる。古墳時代の溝は北西から南東に流れ、幅約 9 m で所々に杭列が検出され、多數の土器や、鉄器なども出土した。

特筆すべき遺物には約80枚の平瓦と丸瓦群がある。軒瓦は一点も含まれないが、いずれも完型品に近く、未使用か再利用の瓦と思われる。凸面は格子たたきをなで消し、凹面は布目痕を持つ。完型品が多いため良好な資料である。湖底遺跡のため木製品が農具、祭祀具、建築部材など弥生時代から古墳時代にかけて多種多様に出土している。

本遺跡は平均水位-1.0～-1.5 m で溝や水田状遺構、瓦群が検出されたことから、琵琶湖の水位変動を知る貴重な遺跡であり、古代の赤野井湾の繁栄を推察できる重要な地域である。

（飼滋賀県文化財保護協会 濱 修）



瓦出土状況

51. 中世の一大集落跡

守山市横江 横江遺跡

昭和58年度より実施してきた県住宅供給公社の宅地開発に伴う発掘調査もいよいよ3年目を終えようとしている。本年度は1,200m²について調査を実施したが、ここでは第13調査区（調査面積約2,500m²）についてその概要を報告したい。

本調査区からは昭和58・59年度の調査で検出された中世の溝で区画割された集落の続きが検出できた。区画地（屋敷地）は新たに2区画が加わり、現在8区画の屋敷の内容が明らかになっている。区画の規模は大きなもので40m×45m、小さなもので13m×17mあり、それぞれに2～5棟以上の建物と井戸を有する。建物の規模には大小があり、それぞれ主屋や小屋等の性格が考えられる。また、今回の調査では炉、あるいはカマドと考えられる遺構が検出できた。これは90cm×80cmの範囲内に焼土塊と炭化物がほぼ円形に検出され、一部には焼けた壁がたち上がるというものである。この近くの溝からは土製の堀が1個体出土しており、ここでの煮沸を連想させる。

出土遺物は、区画溝などから大量の土師小皿や黒色土器碗を中心に、土製の堀・釜・常滑・信楽・東播系の陶器・青・白磁の碗や皿・滑石製石鍋・紅皿・漆器碗・輸入銭など豊富である。

（守山市教育委員会 宮下 瞳夫）

52. 中世の一大集落跡

守山市横江 横江遺跡

県住宅供給公社の宅地造成のための事前調査として、滋賀県教育委員会と守山市教育委員会によって調査されている横江遺跡も今年度で3年目をむかえている。

今年度は第11～13調査区(12,000m²)の調査を行った。

第11調査区では古墳時代前期の掘立柱建物跡、方形周溝状遺構が検出され、後者からは古式土師器が溝中



第13調査区

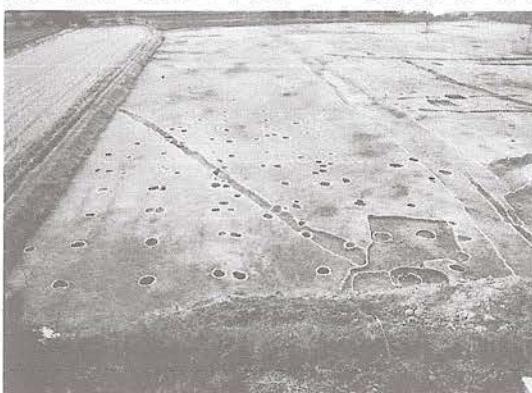
より一括で検出された。さらに幅約3m、深さ約1mの溝に囲まれた28m×38mの13世紀末～14世紀初めの屋敷跡が検出され、建物が3棟、井戸が1基検出された。またこの区画溝からは、多量の土師皿、黒色土器碗を中心に、釜、鍋、こね鉢、常滑焼甕、青磁碗・白磁碗、青磁合子、漆器小皿等の豊富な器種がセットで検出された。

第12調査区では、6世紀後半の溝より須恵器や土師器と共に耳環、滑石製紡錘車、滑石原石、玉磨砥石が出土し、石製品を集落内で製作していた様子がうかがえる。また中世では13世紀前半の掘立柱式建物跡、土壙墓が検出された。中でも幅約2m、深さ30～50cmの溝に区画された25m×25mの屋敷跡では、建物が4棟と広場と考えられる空間が見つかり、一軒の屋敷の構成を具体的につかみとることが出来た。その他に13世紀前半期の建物跡が、11棟確認できた。また土壙墓からは、北向きの辺に白磁碗が2つふせた状態で見つかり他に土師皿が1つ見つかった。以上、各調査区の主な部分だけ紹介したが、調査も3年目となり横江遺跡における中世集落の資料も蓄積され、あと1年の調査を含めて歴史的評価、位置付けを行っていくことが課題となる。（財滋賀県文化財保護協会 森 格也）

53. 弥生時代～古墳時代前期の方形周溝墓・土壙群

守山市守山 吉身西遺跡

本調査は、県立成人病センター内に増設される小児保健医療センター敷地内の事前調査で、約8,500m²について調査したところ、方形周溝墓9基、土壙9基、溝跡2条、井戸跡6基、ピット群を検出した。方形周溝墓は一辺約20～25mのプランをもつものが2基、同じく10m前後のものが4基検出され、前者がU字状、後者がV字状の周溝断面の形状を示す。以上の周溝墓からは多量の後期弥生土器・古式土師器を検出し、そのうち1基は後期弥生土器のみを含む溝1条を切り込む。土壙は9基のうち、2基を除いてすべてが3m以内の小判形のプランを呈し、出土遺物は稀少なもの、



第12調査区



方形周溝墓群

周溝墓群に伴いあるいはやや後続する土壙群と考えられる。井戸跡は1基のみが、縦木枠を遺存していた。

(財滋賀県文化財保護協会 岩間 信幸)

54. 室町時代後半の集落の調査

彦根市 妙楽寺遺跡

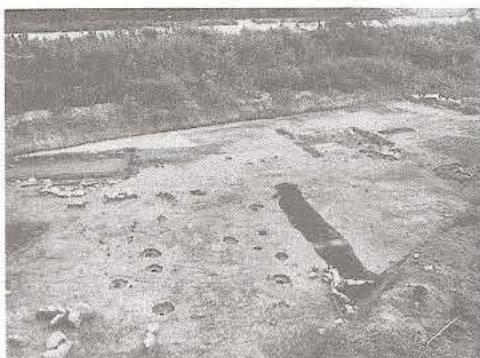
妙楽寺遺跡は、彦根市南部にある孤立丘陵・荒神山の東麓に位置する遺跡である。現在の横川と宇曾川に挟まれた畠地には「古屋敷」という字名が残っているが、「彦根市史」ではこの地を、荒神山の北尾根にある日夏城の城下町の遺跡として紹介している。今回、宇曾川の河川改修に伴って調査を行ったのは、この「古屋敷」と呼ばれている地区である。

調査の結果、室町時代後半を中心とする集落跡が検出された。検出された遺構は、溝・ピット・土壙・土壘・溜め耕を始めとする石組み遺構などである。残念ながら、この時期の建物跡は検出できなかったが、溝・土壙・石列などから屋敷割りがある程度までうかがえた。

大溝を流れる水を利用するため、大溝の肩部に造り付けられた石組み遺構が2基検出された。さらにそれらを分け隔てるように、大溝に直交する方向の溝が掘削されている。これらの遺構群より、間口17.5m・奥行12.5mの屋敷地が推定された。また、他の溝・土壙・石列の間隔についても同様の数字があつてまるものが多い。

出土遺物は、16世紀前半頃に位置づけられる陶器・土師器を中心に磁器・瓦質土器のほか、木器・金属器・石製品なども若干出土している。陶器は信楽と美濃・瀬戸の製品がほとんどである。

以上のように、当調査によって室町時代後半の集落の一端がうかがえ



大溝周辺の遺構群

たが、この集落が少なくとも17世紀には廃絶、あるいは著しく縮少することを考え合わせれば、近世社会の転換期の様相をうかがい知るうえでの貴重な資料となろう。

(財滋賀県文化財保護協会 伊庭 功)

55. 横尾山古墳群の概要

大津市瀬田橋本 横尾山遺跡

横尾山古墳群は大津市瀬田橋本町にあり、瀬田川へ向かって東から西へのびる丘陵の南斜面に分布している。

今回の調査は京滋バイパス工事にともなう事前調査であり、そこで検出された古墳は28基、その他テラス状の掘り込みや溝等が検出されている。また、古墳の比定される年代は7世紀中頃を中心とする数十年間であろうと考えているが、遺物の中には8世紀のものや10世紀のものも含まれている。

墳形においては、円墳方墳の他、主体部の上に三日月状の小溝を掘りその土を盛っただけのものや、溝をともなわないもの等がある。

主体部においては、長さ・幅で1mをこえる巨石を用いた横口式石槨や礫石を積んだ片袖式の小石室(左・右がある)、木炭槨があり、また土壙に木棺葬をしたものやそのまま直葬したもの等がある。さらに主体部の掘り方がきわめてしっかりした四角形を呈し小礫を敷きながら、石材や釘が検出されないことから、組合せ式の木室ではないかと推定できるものもある。

棺においては、大部分が木棺あるいはまったくの直葬であろうと考えられるが、須恵質と土師質の陶棺も出土している。

以上の様に、横尾山古墳群はきわめて多様な要素を含んで構成されていると共に、7世紀中頃の政治状況における瀬田地域の持つ歴史的意義とその後の展開を考える時、また横尾山の木炭槨墳が8世紀の太安万侶墓等の先行形態である可能性もあること等々から、横尾山古墳群は、地域史上においても古代国家成立史上においても、きわめて重要な意義を有するものである。

(財滋賀県文化財保護協会 造酒 豊)



1号墳石室